

「今は我慢だ、八中生！」 ～学びを止めない～実践報告

八街市立八街中学校長 おりめ 折目 たかかず 宇和

1 はじめに

本校の本年度の研究主題は、「すべての子供の学力・得点力を高める授業の在り方～八街中学校区型新しい「学び合い」の実践を通して～」である。「ITの先進を目指そう」と高らかに始めた取組ではなかった。しかし、世の中は「コロナ禍」となった。本年度の当初に生徒たちと出会い、さあ始めようとした矢先の休校である。教室移動等の作業もままならず学習道具もそのまま、上履きも昇降口にそのまま休校へ突入し、時は止まってしまった。皆さんの学校でも同様な状態であったのではないかと推察される。

このような状況であるので、研究報告ということではなく、実践報告としたい。取組の順で「休校中の教材動画配信」と「リモート生徒総会への取組」、「リモートでの授業展開」を紹介させていただく。

2 本校の取組

(1)休校中の教材動画配信



本校Webサイトのトップページ

本校のWebページをご覧いただければと思うが、職員の「学びを止めるわけにはいか

ない」との声から、休校で自宅学習中の生徒に対して教材動画を配信することとし、各教科担任が作成した教材動画を本校のWebページ上にアップし、YouTubeを活用して配信した。本校の校訓「拓道（困難を切り開く精神）」を生かした試みになればとの思いから、「ネット拓道塾」と命名した。

内容は技能系の教科を「全学年共通の課題」として、各教科を「学年ごとの課題」と分けたこと、また、導入初期であることから、できるだけ親しみやすく、興味をもって取り組んでもらいたいとの思いで、制作に取り組んだ。企画時間・制作時間は、初回こそ2日程度の時間を要したが、制作回数が増すごとにその時間はかなり短縮することができた。技能系の動画では「学校の校歌を覚えよう・歌おう」「自分でマスクを作ろう」等、各教科では「入試に役立つもの（3年）」、それから入学前ではあったが、安心材料を提供することを第一目的に新入生へ向けたものも制作した。制作動画総本数は184本に達しており、貴重な財産となっている。

このような取組に対し、以下のような点が感想として得られた。

①教師の感想

対面授業時の「エー」とか「あー」とかがない、必要な言葉だけで教示をするようになった。平素の授業に無駄な説明がなくなった。結果、「教師の説明がわかりやすくなった」と感じている。

②生徒の感想

- (ア) 注視する点が画面のみとなり、教室の余計な雑音が入らず、集中できた。
- (イ) どんな姿勢でも注意されない。
- (ウ) 一時停止ができる。繰り返し再生ができる。
- (エ) 視覚重視になるので、わかりやすい。
- (オ) 「指名されない」から安心できる。

(2)リモート生徒総会への取組



生徒総会は例年、5月に全校生徒が体育館に集まって開催している。今回は生徒会が各委員会の役員による話合いの結果、「密」を避けるためにリモートで7月に実施した。

教室では大型モニターでアプリの画面を表示し、教壇脇にカメラ付きのパソコンを配置。学級の代表がパソコンの前に座って別室の生徒会や委員会の役員らとやりとりし、生徒全員がモニターでそれを視聴するというものである。

総会是一部で音声トラブルがあったものの順調に議事を終了することができた。生徒会長は「当初は接続やカメラとの距離感がうまくいかなかったが、リハーサルを繰り返して慣れてきた。なかなか行事ができない状況の中、自分たちで考えて判断したことを実行できて良い経験になった」と振り返った。

(3)リモートでの授業展開



本校は令和2・3年度と千葉県教委指定「地域における食育推進事業」をいただいて授業研究を進めてきた。当初、授業者は栄養教諭と共に1学級内での授業展開を考えていたが、前述のリモートへの実績を経てきたところで、職員からの「ここまで、できてきたのだから、リモートでやってみようではないか」との発案で、9月に教諭2名（家庭科担当・栄養教諭）で3年生5学級での公開授業研究会（災害時の食への備え）を5教室へ同時展開をした。1学級から他の4学級へ発信をして「災害時でもおいしい食事をとるための工夫はできるか？」との学習問題について各教室で一斉に取り組んだ。展開の中では、様々な意見が班・学級ごとに発表され、生徒たちは普段よりも多様な意見に触れることができたことは大きな成果である。反面、各意見の発表を、授業者が画面を通しての確認に時間を費やし、意見を深めることについては課題もあることにも気が付くことができた。他教科においても、機会があれば積極的にいろいろな場面で展開を計画していく予定である。

3 終わりに

突然の休校による、必要に駆られての取組となったが、ポジティブに解釈すれば非常時であったことで、職員の「やるしかない」との気持ちが、一気にリモート進展を加速させた。リモートは伝達までに両者の距離は問わない。時間も天候も問わない。大変に優れたものであり、将来、どのように発展していくのが大変楽しみである。しかしながら、教育活動の中での一つの教具であり、創意工夫をこらして活用を図るが、最終的には目の前の生徒の繊細な表情やその息遣いの変化を見逃さない授業展開には、今のところかなわないでいる。